



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国朝鮮族出稼ぎ労働者の性格と母村の変化：韓国への移動を中心に〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	李, 雪蓮
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(農学)
Dissertation Number	甲第13268号
Issue Date	2018-06-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71214
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Li_Xuelian_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（農学）

氏名 李 雪蓮

審査担当者	主査	准教授	朴	紅
	副査	教授	坂下	明彦
	副査	教授	近藤	巧
	副査	准教授	小林	国之

学位論文題名

中国朝鮮族出稼ぎ労働者の性格と母村の変化
－韓国への移動を中心に－

本論文は序章、終章を含む6章からなり、図 17、表 52、文献 336 を含む総頁数 103 の和文論文である。別に2編の参考論文が添えられている。

中国朝鮮族は、朝鮮半島から中国東北部へ移民した人々が、本国が日本から解放されて以降も中国に継続して居住し、国籍を取得して認定された民族である。主に東北部に多く分布し、歴史的には稲作生産に先鞭をつけ、農村部の中堅として活躍してきた。およそ 50 の朝鮮族自治郷が設立され、その下に朝鮮族単一ないし一部漢民族と混住する村が形成されてきた。

しかし、中国では、1970 年代末から国内体制の改革および対外開放政策が行われ、農村地域の住民が経済発展する沿海部の都市などへ出稼ぎするケースが増加している。朝鮮族の場合にはこれに加え、国交樹立後の韓国に多数の朝鮮族農民を出稼ぎ者として輩出し、現在では 200 万人のうちの 60 万人以上が韓国に在留している。

本論ではこの朝鮮族に焦点を当て、1990 年代以降における中国朝鮮族の国内移動と韓国への移動の出稼ぎ像を示し、そのことが母村に及ぼす影響を明らかにすることを課題としている。労働力移動に関する制度や統計的整理にも力を入れたが、方法的には韓国で1年以上にわたり中国朝鮮族の参与観察を行い、合計 50 名に及ぶ出稼ぎ労働者のデータを蓄積し、議論を行った点が本論の特徴である。

第1章では、まず朝鮮半島から中国東北部への現朝鮮族の移住の経緯を前提的に述べている。その上で、中国全体や事例として取り上げる吉林省における農村からの出稼ぎの概況を示し、第3章で事例とする 50 名の中国国内での出稼ぎの経緯を明らかにしている。

第2章では、韓国における外国人労働者の中でも圧倒的に多い朝鮮族の出稼ぎ労働者を中心に、その受入政策の背景とその内容を整理し、政策変化の要因を分析し、現在の到達点を示している。韓国の経済急成長に伴う労働力不足問題の緩和のために、韓国では外国人の労働力受入政策を順次導入している。こうした在留資格制度の緩和の下で、中国朝鮮族はより安定した身分で働けるようになっていく。就業先は国内労働者保護のために制限され、中小規模企業への就業が奨励されたが、朝鮮族の出稼ぎ労働者はこのような制度に順応し、自らの出稼ぎ希望を満たしつつ、2016 年には韓国経済活動人口の 2.4% を占めるまでになった。

韓国側の外国人労働力の受け入れ政策が進む中で、朝鮮族はどのような動きをとったかを第

3章では検証している。50名の朝鮮族の出稼ぎ者を事例として取り上げ、韓国出稼ぎにおける滞在資格の変化、就業、生活、福祉等の実態を整理し、出稼ぎパターンの類型化と今後の方向性を明らかにしている。約20年間にわたる韓国出稼ぎが進む中で、就業、居住環境と法的地位は大きく改善されたが、現在の出稼ぎ者は20歳台から70歳台までと年齢層が広がっている。その結果、隠居者から児童までの滞在者がおり、家族単位でのマイグレーション現象が見られた。その移動状況を上述の視点から定住者、リターンマイグレーション、一時的なマイグレーションの3種類に区分している。

このような朝鮮族の韓国への出稼ぎは、中国東北地方の母村でのコミュニティそのものを喪失させる現象を惹起している。そこで、第4章では、朝鮮族の離農跡地の賃貸借関係がどのように形成されているかを朝鮮族集落の形態に即して明らかにし、放出された農地を集積する借地農家の性格を明らかにした。朝鮮族と漢民族が混在する準朝鮮族村では農地は村内構成員への貸付が多いが、朝鮮族単一村では農地はほぼ全てが村外への貸し付けとなっている。後者では村内構成員への一括賃貸方式がみられ、借地料水準とその徴収の安定性は前者を上回っていることが明らかになった。

終章では以上を要約するとともに、中国朝鮮族出稼ぎ労働者の性格と母村の変化を整理している。これまで見てきたように、朝鮮族の韓国出稼ぎは受入れ先、送出元、移動主体である朝鮮族自身において様々な影響をもたらしている。

出稼ぎ移動、移住の主体である朝鮮族はコリアンドリームをもって故国へ向かったが、当初は不法労働者としての存在が多数を占めた。現在は滞在資格が緩和され、少数の定住者を除き、出稼ぎを継続している。現在、彼らは韓国政府から「同胞」と承認されるものの、実質的に外国人労働者として位置づけられ、「よそ者」扱いられている。一方の中国でも生活、仕事の主な舞台だった農村地域を完全に離れ、農地耕作権だけ保有している。そして、中国の大都市に居住するのは漢民族に同化され、アイデンティティーを喪失しつつある。

彼らは元の生活の場を離れ、中国の沿海地域や韓国へ移住するなかで、新しいネットワークを築き、朝鮮族としての帰属感を維持することにも努めている。彼らは中国で生まれ育ち、中国の教育を受けたが、韓国に血縁者を持ち、憧れを感じ、出稼ぎ生活を継続している。その期間中に、彼らは中国と韓国という異なる二つの社会に同時に帰属し、両方の影響を受けつつ、どちらにも完璧に帰属しない「境界人」の生活を送っている。住居地と職場は頻繁に変化しており、新しい共同体が生まれる一方で元の農村共同体は消滅しつつある。彼らの連帯感は必ずしも強くなく、中韓両国の人波の中に埋没しつつあることが懸念されている。

このように、本研究は国際労働力移動研究という注目される分野において、従来研究が少なかった中国朝鮮族を対象としてその出稼ぎの実態をリアルに描きだすとともに、その将来方向を占う研究となっている。

よって、審査員一同は、李雪蓮が博士(農学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認めた。